

萩原朔太郎



前橋会場 主催 萩原朔太郎研究会
十月三日から八日まで
前橋西武七階催事場
東京会場 主催 西武百貨店
十月十日から二十二日まで
東京池袋西武百貨店八階・西武アート・フォーラム
展示会は、萩原朔太郎の人と文学業績を中心に日本近代詩史

萩原朔太郎展

の歩みを感じながら特色ある貴重な資料が出品されます。今回初めて公開されるものも多くありますが、そのいくつかを紹介すると、愛用のギター、戦時中の衣料切符、保温器、メモ帳、写真撮影メモ、遺愛の楽譜帳、上田稲子関係資料など朔太郎の全貌を伝えます。



萩原朔太郎自筆絵葉書
(萩原栄次宛 明治38.8.22)

生誕百年特別宣伝計画

- 広告募集概要
1.総額 800万円
2.方法 1口1万円 1口以上
3.期間 昭和61年9月20日まで
4.連絡先 観光協会事務局
市役所商政課観光係 (24-1111)
商工会議所業務課 (34-5111)
- 口座番号
群馬銀行本店 普通 967956
○広告概要
1.市外、県外向
新聞、広告、国鉄車内吊り
(首都圏)
2.市内向
ポスター、看板など

生誕百年祭プログラム

- ▽とき 十月五日(日)午後一時から五時まで
▽ところ 前橋市民文化会館大ホール
▽主催 萩原朔太郎研究会・前橋市立図書館・前橋市観光協会
▽後援 前橋市・前橋市教育委員会・群馬県文学会・群馬詩人クラブ

講演「もし仮に朔太郎が……」
詩人・評論家大岡 信
舞踊「影を慕いて」作家萩原葉子・舞踊家高井富子
所感「朔太郎と音楽」群馬大学名誉教授山田桂三
音楽 萩原朔太郎イメージ曲
作曲家桑原康雄

百年祭募金のお願い

萩原朔太郎研究会では、昨年十一月から、この百年祭の実施にあたり募金をお願いしています。現在までに多数の方々から貴重な資金を寄付していただき、厚くお礼申し上げます。しかし、未だ目標額に達しない現状でもあり、なお皆さんからの募金をお願いしております。寄付金は、一口千円以上、特別寄付金として、一口一万円以上となっており、皆様のご協力を心からお待ちしております。なお寄付の送金先は、〒371前橋市大手町二丁目十九番九号前橋市立図書館内、萩原朔太郎研究会宛です。(電話 〇二七二二二四三二)

●萩原朔太郎自作詩朗読(レコード盤による朔太郎自身の肉声によるものです)
当日総合司会を担当される古藤田さんは高崎市の出身。また、あいつをさる宇野千代さんは朔太郎の東京馬込時代を知る友人であり、また大岡信さんの朔太郎論とすばらしい講演。朔太郎の長女萩原葉子さんは自ら洋舞を披露され、高井富子さんは前女出身の舞踊家。そして朔太郎作曲の「機織る乙女」の発見者山田桂三さんのエピソード。さらには、今回初めて歌われる星屋作詩、朔太郎作曲の「野火」の発表。前女マンドリン部の「春雨」「真白き不二」(ともに朔太郎編曲になるもの)等々多彩な行事となりました。全体の構成を、I・II部に分け、朔太郎の詩と音楽でつづつてみました。もちろん朔太郎研究会会長の伊藤信吉さんをはじめ関係者多数の来橋が予定されています。

詩のまち前橋が生んだ萩原朔太郎を知るよき機会であるとともに、

偉大な詩人を偲ぶ日となりましょう。おせいのご参加をお待ちしています。

萩原朔太郎が生まれてここに百年。朔太郎は明治十九年十一月一日この前橋に生まれた。大正六年第一詩集「月に吠える」を発刊して以来、詩壇に波紋を投げ、今日近代詩史に燦然と金字塔を打ち立てた。この偉大な郷土の詩人萩原朔太郎の生誕百年を記念するとともに、その足跡をたどり、そしてその偉業を偲び、十月五日前橋市民文化会館において「萩原朔太郎生誕百年祭」が盛大に開催される。

百年祭で記念発売

前橋郵便局では、萩原朔太郎生誕百年を記念して次のとおり臨時出張所を開設します。
▽日時 十月四日(土)五日(日) 午前十時から午後五時
▽場所 前橋西武七階(前橋市本町二丁目十二番二)
▽営業内容
○過去に発売された記念切手の販売
○朔太郎生誕百年記念台紙の販売など。

▽その他 臨時出張所では、切手マニアの方々に人気の朔太郎生誕百年記念の記念スタンプ(特別日付印)の押印サービスを行います。



前橋市長 藤井 精一

日本近代詩史に不滅の足跡を残した詩人、萩原朔太郎の生誕百年祭が、詩人の故郷前橋市で開催されますことを、二十七万市民とともに心からお祝い申し上げます。

す。詳細は、前橋郵便局へ。(34・5523)
また、NTT前橋と国鉄前橋駅でも、朔太郎にちなんだデザインで「テレホンカード」と「記念キップ」をそれぞれ限定販売します。

テレホンカードは価格五百円(五十度数)で前橋電話局(34・9883)と市観光協会(24・1111、34・5111)で十月一日から発売。
記念キップは前橋駅高架化完成記念券も兼ね価格は三百二十円(入場券、前橋一高崎間)で十月六日に国鉄前橋駅(24・8005)で販売します。

生誕百年祭を祝して

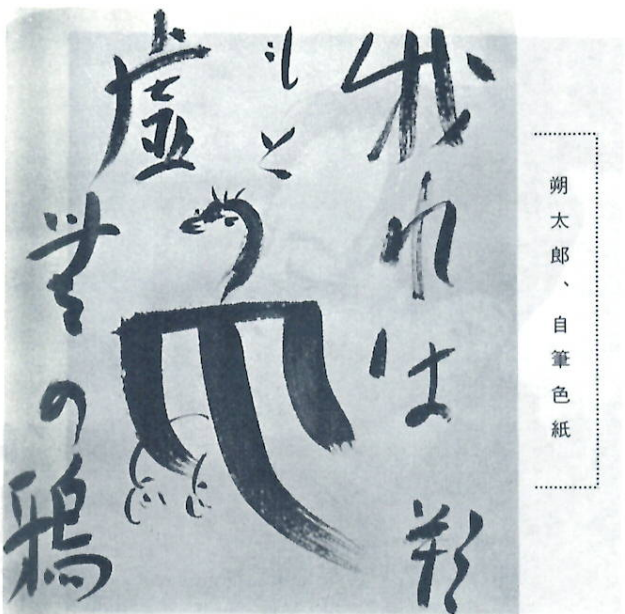
今年は、詩人萩原朔太郎の生誕百年に当たります。日本の近代詩に大きな変革をもたらした萩原朔太郎が、万感の想いを詩に託し、彼の心に大きな比重を占めていた「故郷前橋」で生誕百年祭が行われます。

観光協会も生誕百年を記念して、様々な事業に取り組んでおります。また、歴史と文化に育まれた自然豊かな前橋を、できるだけ多くの人達に理解して頂くよう努力しているところです。



前橋市観光協会 会長 佐田 一郎

萩原朔太郎をはじめとして多くの詩人を生み出した私達のまち前橋が、文明開花の結晶の時期に近代詩の発祥地となったまち、それをしっかりと受け継いでいるまちとしての前橋の発展を念じ、ご挨拶いたします。



朔太郎、自筆色紙

朔太郎と詩作

宅でこの世を去った。時に五十七歳。葬儀委員長には、義弟にあたる佐藤惣之助があつた。いま市内田口町の政淳寺に眠る。

朔太郎は、自分の文学的自覚は中学二年くらいからであつたと後年回想している。中学三年のとき校友会誌『坂東太郎』に短歌五首を発表した。このころ町田嘉章（邦楽研究家のちに佳声と改めた）らと文学グループ「野守会」をつくり、その中心

幕鳥と『卓上噴水』を創刊、翌五年には、『屋星』と『感情』を創刊した。このころから詩人グループの懇談会にも出席した。

そして大正六年第一詩集の『月に吠える』を出版、全詩壇から注目された。しかし、この本が内務省の検閲にかり二篇が削除されて発行された。朔太郎は、これに対し『風俗壊乱の詩とは何ぞや』と題して上毛新聞に抗議文を掲載した。

以後『新しき欲情』（大正十一年）『青猫』（大正十二年）『純情小曲集』（大正十四年）『詩の原理』（昭和三年）『氷島』（昭和九年）等々を出版した。特に昭和十六年出版の『帰郷者』によって透谷文学賞を受

朔太郎と音楽

朔太郎が音楽とかかわつたのは早い時期ではあるが、正式にとなると明治四十四年当時マン・ドリン界の先駆者比留間賢八にマン・ドリンを学んだことにはじまる。その後、独奏家田中常彦あるいはイタリヤ人アドルフ・オ・サルコリについても習った。

大正三年前橋市内に開設された『洋楽指南所』の教授となり、翌四年『ゴンドラ洋楽会』を組織し指導にあたつた。のちに「上

朔太郎を偲ぶ記念館

いま敷島公園バラ園内に朔太郎生家ゆかりの「離れ座敷・書斎・土蔵」を一つにまとめ「萩原朔太郎記念館」として無料公開している。特に「書斎」は、独身時代の大正三年から八年までの約六年ここで過ごした。この建物、もともとは萩原家の味噌倉だったが、朔太郎自身によって書斎に改造されたものである。西洋風に統一され装飾や家具類も、いわばハイカラなもので朔

萩原朔太郎略年譜

- 明19・11・1 東群馬郡前橋北曲輪町六九（現在の前橋市千代田町二丁目）に萩原家の長男として生まれる
- 明33・4 群馬県立前橋中学校へ入学。中学三年のとき校友会誌『坂東太郎』に短歌五首を発表
- 明42・7 雑誌『スバル』に短歌二首が掲載される
- 明45（大元） 雑誌『朱槿』をみて北原白秋に詩や短歌を送る。数年間にわたり、はげしく傾倒した
- 大2・4 『朱槿』に掲載された室生屋星の抒情詩に感動して手紙を送る。生涯の友となる。
- 大3・2 室生屋星前橋に来遊、二〇余日滞在す
- 大4・1 北原白秋、萩原家に一週間ほど滞在す。ゴンドラ洋楽会を組織。のちの上毛マン・ドリン倶楽部
- 大5・6 室生屋星と雑誌『感情』を創刊
- 大6・2 第一詩集『月に吠える』を出版
- 大8・5 上田稲子と結婚
- 大9・9 長女葉子生まれる
- 大11・4 情調哲学『新しき欲情』を刊行
- 大11・9 次女明子生まれる
- 大12・1 『青猫』を刊行
- 大14・8 『純情小曲集』を刊行
- 大14・11 佐藤惣之助と『日本詩人』の編集を担当
- 昭3・2 『詩論と感想』を刊行
- 昭3・3 『萩原朔太郎詩集』を刊行
- 昭4・7 稲子夫人と離別。二児を伴って帰郷す。
- 昭6・5 『恋愛名歌集』を刊行
- 昭8・2 自分で設計した世田ヶ谷の新局に移る
- 昭9・6 『氷島』を刊行
- 昭9・7 明治大学文学部文芸科講師となる
- 昭11・3 『郷愁の詩人と謝蕪村』を刊行
- 昭12・2 神保光太郎・保田重郎同道で帰郷、上毛新聞主催の歓迎会に出席す
- 昭13・4 大谷美津子と結婚
- 昭15・12 『帰郷者』により透谷文学賞を受賞
- 昭17・5・11 肺炎のため自宅で逝去、五十七歳

生いたち

わが国の近代詩上に大きな足跡を残した萩原朔太郎は、明治十九年（一八八六）十一月一日当時東群馬郡前橋北曲輪町六九（現前橋市千代田町二丁目）で父密蔵、母ケイの長男としてこの世に生まれた。

密蔵が医院を開業しており経済的にも豊かで、毎年夏になると一家そろって温泉地や海へ避暑に出かけた。

朔太郎は、幼いころから病弱であつたようだ。父が忙しかつたので母の手で育てられ、長男だつたこともあって、たいへん可愛いがられた。

群馬師範学校の附属幼稚園から附属小学校へと進んだ。さらに、十五歳で前橋中学校（現前高）に入学した。このころの朔太郎は、手品・幻燈・手風琴・ハーモニカなどで楽しんでゐた。その後、第五・第六高等学校などに学んだが、ついに学業を終えることなく退学した。二十六歳ごろからマン・ドリンに熱中す



朔太郎撮影写真（大正時代）現在の中央通り商店街

文人との交流

賞した。この間「現歌壇への公開状」を発表するなど、歌壇批判を行うとともに新しい詩を求めて努力した。

まず生涯の友とした室生屋星とは交流が激しかった。北原白秋は前橋に朔太郎を訪れ一週間ほど萩原家に滞在した。また谷崎潤一郎とは再三にわたり訪問しており、東京田端時代には、芥川龍之助・中野重治・堀辰雄らと知り、日光では保田重郎・岡本かの子・中河与一らと遊び、この外、三好達治・梶井基次郎・草野心平・丸山薫・西脇順三郎（前朔太郎研究会会長）・桑原武夫らとも交友関係にあった。もちろん地元前橋の詩人高橋元吉・萩原恭次郎・伊藤信吉らとも深いかわりがあった。

才川町

—十二月下旬—

空に光った山脈
それに白く雪風
このころは道も悪く
道も雪解けに
ぬかつてある。
わたしの暗い故郷の都会
ならべる町家の
家並のうへに
かの火見櫓を
のぞめるごとく
はや松飾りせる
軒をこえて
才川町こえて赤城をみる。
この北に向へる
場末の窓々
そは黒く煤にとぎせよ
日はや霜にくれて
荷車巷路に多く通る。

郷土望景詩

これだけ生まれ故郷の詩をうたつた詩人も珍らしい。その後前橋は戦災にあい街の姿も大きく変わった。もちろん朔太郎は知るよしもない。しかし朔太郎が残した詩は変らない。この前橋を愛し、この前橋をなつかしんだ。萩原朔太郎は、いまなお前橋に生きつづけているのだ。